

『日本アジア研究』第10号（2013年3月）

中国の回復者村の支援活動に打ち込んで ——ハンセン病療養所「星塚敬愛園」聞き取り——

福岡安則*・黒坂愛衣**

小牧義美（こまき・よしみ）さんは、1930（昭和5）年、兵庫県生まれ。1948（昭和23）年3月、宮崎県から星塚敬愛園に収容。1951（昭和26）年、大阪へ働きに出ることを夢見つつ、長島愛生園に移る。病状が悪化し、社会復帰を断念して、1959（昭和34）年、敬愛園に戻る。その後、1962（昭和37）年から1968（昭和43）年まで、熊本の待労院での6年間の生活も経験。1987（昭和62）年から1990（平成2）年には、多磨全生園内の全患協本部に中央執行委員として詰めた。そして、2003（平成15）年にはじめて中国の回復者村を訪問、2005（平成17）年から2007（平成19）年の2年間は、中国に住み着いてハンセン病回復者の支援に打ち込んだ。2008（平成20）年8月の聞き取り時点で77歳。聞き手は福岡安則、黒坂愛衣、下西名央。2010（平成22）年5月、お部屋をお訪ねして、原稿の確認をさせていただいた。そのときの補充の語りは、注に記載するほか、本文中には〈 〉で示す。

小牧義美さんの語りで、あらためて「癩／らい予防法」体制のおぞましさを再認識させられたのが、自分以外のきょうだい、兄1人と妹2人も、おそらくはハンセン病患者ではなかったにもかかわらず、ハンセン病療養所に「入所」しているという事実である。兄は、病気の自分と間違えられて、仕事を失い、行きどころがなくなって、良心的な医師の配慮で「一時救護」の名目で、敬愛園への入所を認められている。上の妹は、義美さんに続いて母親も病気のために入所して、父親は疾うに亡くなっており、社会のなかに居場所もなく、「足がふらついている」ことでもって、おそらくは「ハンセン病患者」として入所が認められたのだろう。そして、入所者と園内で結婚。下の妹は、敬愛園付属のいわゆる「未感染児童保育所」に預けられたが、中学をおえても行き場所がなく、「おふくろの陰に隠れて敬愛園で暮らしておった」が、やはり、入所者と結婚、という人生経路をたどっている。——義美さんは、きょうだいがハンセン病でもないのに「ハンセン病療養所」の世話になったことに、一言、「恥ずかしい話だけど」という言葉を発しているが、わたしたちには、「癩／らい予防法」体制こそが、義美さんのきょうだいから、社会での生活のチャンスを奪ったのだと思われる。

もうひとつ、小牧義美さんの語りで感動的なのは、当初は、桂林の川下りを楽しむために中国に行っただけと言いながら、いったん、中国の「回復者村」の人びとと出会い、後遺症のケアがなにもされないまま放置されている

* ふくおか・やすのり、埼玉大学教養学部教授、社会学

** くろさか・あい、埼玉大学非常勤講師、社会学

なお、本稿はJSPS KAKENHI Grant Number 22330144（2010～12年度科学研究費補助金基盤研究（B）「ハンセン病問題の《集会的な語り》の記録化の追求」、研究代表者＝福岡安則）の研究成果の一部である。

現実を目にして以降、日本政府からの「補償金」を注ぎ込んで、中国のハンセン病回復者とその子どもたちのための献身的な支援活動に没頭した小牧さんの生きざまであろう。

キーワード：ハンセン病，隔離政策，ライフストーリー

中国に2年いて帰国したところ

ぼくは、耳が遠いし、目もうろうろしてて。足は失ったし。片足ですけど。

あのね、ぼくがいま星塚敬愛園（ここ）にいるのは、2年前に中国に行ったんですよ。2年近く〔中国に〕いて、足を傷めて、去年の11月に帰ってきて、鹿屋の病院で診てもらったときに、「もう、このままではいかん。もう一度、敬愛園に入って、健康になって、また行け」と。〔そして、右足を切断しました。〕そういうことで、ぼく、ここにまた厄介になったんですけど。まあ、そういうこともあって、いろんなことを経験さしてもらいましたけど。

早稲田〔大学〕の学生たちがハンセン病関係のボランティアで中国へ〔行って〕。原田療太郎は、2003年に、早稲田を卒業すると中国〔の回復者村〕へ入り込んで、ときおり帰ってくると、1週間したらもう、また中国へ行ってます。〔中国人女性と〕結婚して、今年〔2008年〕の正月、子どもが生まれた。それで、ぼくはもう帰ってきた。ほんとは、中国で治療してもよかったんだけど、あいつがはじめてのお産だしするから、あいつには迷惑かけられんしと思っ、帰ってきた¹。

——あとは、聞いてください。

宮大工の内弟子をしているときに発症

〔ぼくは〕1930年〔の生まれ〕。〔いま〕77〔歳〕。生まれたのはね、所番地はわからないが、兵庫県。王子製紙っていう工場の社宅で生まれたのよね。おやじが王子製紙に勤めていたから。神崎川の流域の、ちょっと上のほうになるかな。

〔育ったのは〕ぼくは、もう、どこでっていうことはない。あっちに3年、こっちに4年、あっちに7年。で、療養所へ入っても、敬愛園（ここ）で3年で、すぐ岡山〔の長島愛生園〕に移って。岡山で7、8年おって、また帰ってきて。敬愛園（ここ）に3年いて、また、熊本〔の待労院〕へ行っ、もう転々としてます。

あのね、ぼく自身は〔この病気になったの〕ぜんぜん気がつかなかったね。おふくろが、なんか変だと言って、ひじょうに気にしとったンじゃけど。顔になんか異常があったらしいんですよ。だけど、ぼく自身は、鏡なんか見るといようなそんな状況になかったから。まあ、終戦が15のときですからね。それ以前ごろから、食うものもなにもないからね、生活も荒れとった。ぼくは、13〔歳〕のときに、昭和19年の3月だったかな、宮大工さんのうちに弟子に入った。だけど、もう昭和19年いうと、そんな仕事ないですよ。だから、軍

¹ 朝日新聞2010年2月6日の「溶け合うアジア・日本／中国1」「心結ぶハンセン病支援／国越え同志集う」の記事に、「中国で元ハンセン病患者を支援するNGO『家（JIA）』を運営する原田療太郎さん（31）」のことが報道されている。

関係の仕事ばかりして、[各地を] 回ったのですから。

〔宮大工への弟子入りのいきさつですか?〕宮崎県延岡市にいたときに、おふくろの知り合いのひとの旦那が、ちょっと、ヤーさんで、そのひとの兄さんが宮大工の棟梁をしちよったんですわ。それで、ぼくが子どものとき、[旧制の] 中学へ行けないちゅうて暴れてね。ぼくは中学の試験は受けたんだけど、どうしてもおふくろは、「カネがないからいかん」。先生が「預かる」って言ったって、それもダメ。「はやく仕事を覚えたほうがいい」つって。ぼくがあんまり暴れるもんだから、そのひとに相談に行ったら、「じゃ、おれの兄貴に預けろ」っていうことで、行ったのがその宮大工。ぼくは、なにも、自分で仕事しようとか何とか、そんなんじゃなかったけど、おふくろがそこへ預けよった。

ハンセン病はね、ぼくはぜんぜん知らないんだけど、わかったのは[昭和] 22年の2月ごろ、病院に連れて行かれて。その半年前ぐらいから、病院に何回か行ったんだけど、わからずに、[昭和] 22年の2月ごろ行ったら、その先生が「先生を紹介するから、そこへ行ってくれ」つって、紹介されたのが、おなじ延岡の皮膚科の先生。その先生(ひと)に見せたら、すぐにもう、ぼくに「帰ってよろしい」つって、おふくろと話をしたらしいんですよ。「おまえんちの子は、らいじゃ」と。「どうするかは、ここでぼくが決めるわけにはいかんから。ぼくは、予防法のとおり、届けをしておくから、そっちのほうで相談してくれ」つって言われたらしいんですね。だけど、おふくろはなんにもぼくに言わないから、ぼくは病気だということもわからなかった。元気だし、痛くも痒くもないでしょ。で、[昭和] 22年の4月ごろかな、2ヵ月ぐらいたってから、「病気」つって言われて、家に帰った。[それまで] 内弟子に行っていましたから。棟梁(むこう)が「帰れ」と言ったんじゃないですよ。おふくろがね、行って、「帰してくれ、うちが大変だから」つって。おやじがぼくが6歳のときに死んでましたからね。「家が大変だから、帰してくれ」ちゅうげなことで連れて帰ったらしいんですよ。ところが、いまになって思えば、棟梁のうちの人は、みんな、ぼくが病気だちゅうことを知っていたらしいんですよ。それでも預かって、「うちで暮らせ」つっておっしゃったんだけど……。薬もね、なんか見つけてきて、「これ飲め」つって言われた覚えがある。ぼくは、なんにも知らなかった。

何も知らずに収容列車に乗せられて

で、おふくろが「鹿児島にいい病院があるから、鹿児島に行こう」ちゅうから、「病院なら延岡市にもいくらでもある。そんな遠いところへ行かんでもいい」。そういうことがあって、ここに収容されたのが[昭和] 23年の3月23日、この記録では。それね、収容のときに、列車を各地区で止めて、病人を集めて、収容していった。途中でね、ものすごい症状のひどいひとが乗ったのよ。もう、びっくりして。ええっ、これは。なんだか、人間と思えなかったから。じいっと見てたら、5、6人で抱えて、毛布に包んで。それを見て、ソンときにハッと思った。もう、身の毛がよだったね。立ちつくしたまんま、おれもあんななるんだあとわかったのね。

〔ぼくが〕収容列車に乗ったのは、お医者さんが県に報告をしたらしいんですよ。県がすぐ保健所に連絡して、「収容しなさい」と。で、収容日が決まっ

たら、その患者を駅まで連れてこい、ということらしかったね。それ、ぼく、なんも知らんから、おふくろと一緒にいくものと思ってるから、朝、駅に7時ごろ行って、ぼくは先に改札入って、列車を待ってるそこへ行って、それに乗ったんやけど、おふくろがいないんですよ。あれ、別のどこへ乗ったかなと思って、[その車両から]出ようと思ったらもう、通せんぼして。白い予防着きたひとがね、何人も乗ってて。おかしいなあと思って……。

ぼくはなんにも知らないで来たから。そのときにおふくろがいないことを見て、症状の重いひとが乗ったときに、ああ、おふくろはおれを捨てたな、薄々思ったね。[まだ]病名はわからないけど、そのとき見て、ぼくもあんなンなるんだなあということにはわかったね。なんかね、「悪い病気だ」って、おふくろがそういう言い方をしたんですね。だから、「専門の先生は鹿児島にしかいないから、鹿児島に行こう」って言うもんだから、うん、そんな悪い病気なら、早く行こう。だから、収容されるとかなんとかいうことは、自分は知らなかったんですよ。おふくろは、だいぶん抵抗したらしいんですけど、ぼくになんにも言わないから。もう、とにかく言ったら、ぼくがね、何をしでかすかわからないから、怖い。なんにも言わなかったんですね。

[ぼくは、きょうだいは]4人。[ぼくは]2番目。上が男。下は、2人女。[他のきょうだいには、この]病気は出てないんだけど、けっきょく、「らい家族」ということで、延岡市で、もうひどい目に遭ったらしいんですよ、ぼくが療養所に入ってから。ソんでもう、家もなんも、「おまえらが出ていかなきゃ、火い付けて焼き捨てる」とまで家主が言ったらしいんですよ。それを言われると弱いから、ぼくを、どうしても療養所に入れにやいかんけど、下の女の子はちいさいもんだから、付いていけない。それで、ぼくにはなんにも言わなかったために、駅のところで、どっかへ隠れちゃったんだな、おふくろは。それで、探しても見えない。駅をいくつか行ったときに[病状のひどいひとを]見たときに、ああ、おれもあんなンなるんだあ、ということがわかって、そのときに、ああ、おふくろはおれを捨てたなあ、と思ったですね。それで、あの、宮崎の近くに幅の広い川があるんですよ。あこの鉄橋、かなり長いんだけど。そこで、電車の窓を開けて、飛ぼうとしたんじゃけど、捕まって、引きずり込まれたのよ。そういうことも、あったね。もうどうせ、連れて行かれて、注射を打たれて、焼き殺されるだろうと。そんなことばっかり、頭に。どこをどう通ってきたか知らんけど、鹿屋の駅に着いたときも、逃げることを考えたね。それで、どこにどげな山があって、線路がどこへんにあるっていうこと、もうそんなことばっかり考えて、とにかく、どこかでトラックを飛び下りて逃げなきゃいけない、って思ったんですよ。

で、駅から上がってきて、そこの収容の門を入るとき、とにかく、あのときは、夕方ものすごく寒かったけども、ものすごい夕日がきれいで。[夕日が]薩摩半島のほうへ沈むときに。星塚[敬愛園]に、もとは煙突があったんですね。いまは水槽が建ってますけど。あの煙突やなあ、と。いまは畑になってますけど、[あたり一帯]灌木だらけだったですよ。それで、ああ、あの山のなかにあるんだなあと思って。だれも[見ているものが]いないところやから、どうせ、あの煙突で焼かれるんだわと思いつつながら。で、小遣い少し持ってたのを確かめて、おなかに入れて。もう、着替えは捨てて。いつでも飛べるようにして。そのときはまだ元気やったですからね。裸足で走り回るし、大工はする、

左官（しゃかん）はする。どんなことでもやりましたから。逃げることばかり頭に。で、療養所に入ってくと、長屋が何軒も〔あって〕。灌木があるから、むこうから見えなかったんですよね。そしたら、まわりに、ぼくらみたいのが、いっぱい、バスのまわりに取り巻いたですもん。逃げられんようになって。でも、考えたら、おなじようなのが、これだけおるちゅうことは、殺してるわけじゃないんだということ気がついて。で、もう、言われるままに、風呂に入れてもらって、病棟に連れて行かれて。それからあとは、青年寮に1週間ぐらいして〔入った〕。

〔入所したとき、医師の診察は〕ありました。そうですね、自分の気持ちですが、なんていうのか、別世界に入ったなっていうような感じがしてましたから、もう、先生の言うことなんかほとんど聞いてない。ただ、上半身裸になって、写真を撮られたことは覚えてますわ。ですから、ぼくの初診のカルテがあれば、〔そのときの〕写真もそのまま付いてると思いますね。——〔先生は「らい」ということは〕なにも言わなかったね。ただ診察しただけで、「はい、いいよ」つって。あの、なんちゅうのかな、どこにもある〔身体の〕絵が描いてあって、そこに症状の出てるどころ、なんか印付けてた。その程度だったですよね。

〔それから〕「名前を変えたければ変えていいよ」つって、〔事務〕分館の係のひとから言われた。その意味がぼくはわからなかった。ぼく自身、名前なんて1つありゃいいやと思ってたから。なにも、家族に迷惑がかかるなど、そんなこと考える余裕はどこにもなかったですからねえ。〔ですから、ぼくはずっと〕本名です。〔偽名を〕使ったことない。

〔収容は昭和23年でしたが、まだ解剖承諾書は〕ありましたね。ぼくは「嫌だ」と言った。死んでから〔のこと〕と考えれば問題ないじゃろうけど、生きてるおれに解剖〔の承諾〕なんか、「嫌だ!」と言った覚えがある。怖くて。

〔収容時点で所持金を園券に取り替えられるというのは〕それはもう、あのころなくなっていました。あるのは見たですわね。靴の紐を園券に穴を通して結びつけて、それを握ってたりするひとはいたね。珍しいことがあるもんだと思うとった。あれが園券だったらいいんですよね。

木工部に配属され腕をふるう

〔入所したのは〕17〔歳〕やったですわね。〔青年寮に入りました。〕昔の長屋は12畳半だったですからね。多いところで8人。少ないところで5人ぐらい。少ないというのはね、元気な者は布団を担いで、不自由者棟に付添いに行ったり、病棟に布団を担いで住み込んで、介護の仕事をしとったわけです。〔青年寮にその人たちの〕籍はあったんだ。あんまり狭いから、小遣いもほしいし、働かにかいかんと思うたもん。みんな、そうやったですわね。でも、ぼくは、仕事柄、すぐ木工部に。

古い長屋はね、12畳半を2つ繋いで、〔そして〕ドームがあって、むこうにまた12畳半が2部屋あったですから。そのあいだの柱が腐れて、落ちてる。で、ガラス戸がもう開（あ）くもできない。で、〔木工部に〕ぼくが行って、「できるか?」つうから、「何が?」ついたら、「柱、替えてほしいんじゃない」と。木工部の主任みたいなひとが、おなじ病人のひとでいたんですよ。ほんとの大工。そのころ、そのひとは自分で仕事ができないで、「できるか?」つって、ぼくを見て言ったですわ。ぼくが道具いじりよつたら、すぐ言った。「替えてほしい

んじゃ」「何を?」「柱」「うん、できるよ」。それで、若い衆で元気なひとが、交換するところへわたしを連れていって、「ここだ」と。それですぐに、造ることはぜんぶ造ってあげて。それで担いでいって、桁(けた)を持ち上げて、柱を引っこ抜いて。そしたら、付いて行ったのがびっくりして。「大丈夫か? おまえ、家が落ちるぞ」ちゅって。「そんなの、落ちやしねえよ。心配いらん」。それで、柱を取り替えて、廊下をまた元のように納めて、それへガラス戸を立てたら、部屋のひともみんなびっくりして。からだは小さかったしねえ。そんなだから、まさかと思ってたんでしょ。それが、パッパッして、元気な大きなひとを指示したんだね。「ここを切れ」とかって。で、自分も鑿(のみ)を使って、穴を彫るところは自分でやったりして。

結核病棟の付添看護も

〔付添看護〕厚生部という患者事務所がありましてね、そこで名簿をつくって、元気なひとをチェックして、「ここ足りないから、これに1週間行ってもらおうじゃないか」って、伝票を切るんですよ。その伝票をもらったら、ぼくはもう、嫌だって言えなかったですね。〔嫌だって〕言っちゃいけないような感じがしたもんだから。「ああ、行くよ」つって。元気だったしね。で、ぼくは、簡単に「行く、行く」つって言ったもんで、ぼくが行くところは結核病棟。ぼくは知らなかったの。そこは誰も行き手がいないんですよ。

〔付添看護の仕事は〕当直4日ぐらい、月に1回はしないといけない。病棟に布団担いで行って、1つ空けてあるベッドで寝て、病人の面倒をぜんぶみます。夕方もお茶を飲ませて、寝るときに薬飲むお茶を飲ませて、ぜんぶやってから寝てたし。ぼくは怖いとかなんとかいうことは全然感じなかった。怖いのは、おれがいちばん怖いんだ。みんな、おれを怖がってる、そういうふうにしかならなかったから。もう、怖いちゅうものなにもなかったね。病気だろうとなんだらうと。

〔付添看護をしてるときに、病気の重い患者さんが亡くなったことも〕あります。ぼくと年、1つ上でね、ぼくとおなじ部屋に来られたひとがいたんですよ。彼がぼくに字を書くことを教えたんだけど。彼は、ぼくが結核病棟で当直してる晩に喀血して。いちおう〔あらかじめ〕教わってましたからね、「喀血したときには、誰か元気な者に連絡行ってもらえ。でなきゃ、自分が行け」。電話があるわけじゃないでしょ。だから、先生が泊まってるこの近くまで行って、大声あげりゃ、むこうのほうで「誰か?」なんて。声出すのは、でかい声、なんぼでも出たから、呼んで。そんでもって〔病棟に〕帰って、首を抱えて、顎(あご)をすこし上げて、横向けて。で、洗面器を耳の下のところにに入れて。もう一杯になってるけど、動きようがない。誰もおらんから。そして、先生が来てから、「そんなことをしたら、いかん」。「おれがしたことば、間違ってるのか」「いや、間違っではないけど、あんたにうつる」。うつるつって、誰か見てにやいかんでしょ。それで、逆に先生を怒ったことありますけど。そしたら、看護師さんのひとが来て、彼が片づけて。それで、〔命が〕危険だというから、ぼくは友達を〔呼んだ〕。そのときにね、聖書研究会で地塩会(ちえんかい)というのがあったんですよ。これ、9人ぐらいいたかな。その仲間にもぼくも入ったんですよ。——そのときに友達が亡くなっていくのを見守ってたけどね。何人か立ち会いましたよ。

米を食べた記憶なし

ぼくが〔ここに〕来たのが〔昭和〕23年。〔沖縄の患者さんたち〕220人ぐらいが沖縄に引き揚げたのが〔昭和〕22年ですから、〔昭和〕22年には〔入所者〕1,300人いたと言いましたね。で、ぼくが来たときには、1,000人ちょっとだったですかね。

食べ物？ これ、大変。何食べたと思う？ 米というのは、ほとんど〔食べた〕記憶がないぐらい。芋ならたくさんあった。たくさんあったって言うと語弊（あ）れがあるけど、芋なら不自由しなかったんですよ。だから、「明日の朝、お粥だそうだよ」「ああ、米が食えるかあ」。見たら芋のまわりに米粒がついてるぐらいですよ。米ちゅうのはないの。お昼は、トウモロコシのパン。これが、あのう、支給品なんですね。アメリカ軍の食料らしいんですよ。ですからもう、かなり古い。焼いたらもう苦くて。あまり食べなかった。それか、あとは芋を食べる。芋を薄く切って、陰干しにしておいてね、干した芋を粉（こ）に挽いて、それを水で練って、手で握って団子して、お湯のなかに入れて、茹でるだけです。それが昼御飯。鹿児島は、まあ幸いなことに、芋はうまかったから、食べなくてはなかったですけどね。もう、そういうものばかりだったね。

〔園内に〕鶏小屋は〔あったけど、鶏の卵や肉は〕ぼくらの口には入らない。もう、ほとんど病棟へ。乳牛が1頭いたんですけど、牛乳（それ）ももう、それこそ、限られて、重症なひとにしか渡らなかったと思いますよ。豚はね、かなりいたから、炊事場で屠殺して、豚は食わしてくれました。ぼくも、脂身をフライパンに入れて、脂を取った。おいしくないんですよ、味噌汁がね。その豚の脂、ラードってゆったけど、それを、味噌汁沸かしてそのなかに入れて食べた。すると、食べられるんですよ。だから、もう貴重品だったですね。ぼくはもう、これ、大島のひとに教わったんじゃないけど、こうして、豚の肉ももらったときに、脂を取って……、白く固まるから、それを金目（かねめ）の缶に入れたらいいよつって、教わって。だから、味噌汁はなんとか食べられたけど。だけど、ご飯のほうがないからね。でも、どうなんだろうね、〔園内の食事が〕いつごろからよくなってきたかと言われると、ちょっと記憶がないんだけど。

芋泥棒のことは村人は知っていた

ぼくは収容されて青年寮に入った晩に、腹減るんですよ。もう、グーグーいうて。誰も話し相手はいないし。顔知らないからね。それで、布団被って寝とったら、芋を炊く臭いがするんですよ。ああ、腹減ったなあ、と思うちょっとしたら、隣の若い衆が、「おい、新患、おまえも芋、食べ」って言われたから、もうガバッと起きて、棒を持って行って、いちばん大きいやつ……（笑い）。それで部屋へ持って帰って、床のなかでしゃぶりついた記憶ありますよ。

〔で、その芋の話だけ〕日赤寮ちゅうのだけが、玄関がドームのところへ突き出して、そこが玄関になつとった。扉（とびら）付けてあったんですよ。ほかは〔入口が〕両端にあったんじゃないけど。日赤寮、そっから行って行ったら、玄関のところに、もうきつないズボンがいっぱい掛かっつんですよ。それが、どういうことにしてあるかといったら、裾（すそ）が紐で結んであるんですよ、両方。不思議なことだ、脱いだものをわざわざまた紐で括るちゅうのは、不思議なことをするもんだ、とぼくは思っつたね。〔じつは〕そこで炊いて食べ

さした芋は、村の畑の芋を盗んで〔きたやつ〕。その芋を入れるために、ズボン、袋代わりに結んで、で、芋を入れて、担いで逃げてきて。もう、しょっちゅう。〔明るいうちに〕探しておいて、晩になったら行く。ぼくは行ったことないけど。そのころまでかな、芋盗(と)りい行ったっていうのは。だから、〔その後は〕かなり食糧がよくなったと思うんですね。

あとで聞いた話だけだね。ぼくも、何度か〔村のひとの家へ〕お茶を飲みに入れて行ってもらったことありましたよ。そしたら「上がれ」つって、上がしてもらって。「腹減ったろう？」出てくるのは芋だけですから、芋をもらって。あとは焼酎だね。ぼくは体が小さいから、飲めつて言うてくれん。ぼくはもう 13 のときから酒飲んでました。かなり飲んべえ。で、ほしかったけど、「飲ませ」とは言えなかったしね。芋をよばれて帰った。そしたらね、話を聞いてると、「おまえらも、夜中に畑に行くことはわかってるけど、つらかろう。若いのに腹減って。だから、ここん衆(し)は、腹のなかで怒ってつても、気の毒やあちゅつて、そのぐらいならもう……」ゆうて、文句言つてこないんですよ。そういう話を聞いたことがあります。村人もね、かなり付き合つてるひとがいたんだ、あのころから、中のひとで元気なひとはね。で、いろいろ話聞いてくると、もうみんな、村人は知つてましたね。「どこの畑の、芋を入れてあるところ、いつの何日(いつか)に盗(と)られた」とか言つて。やっぱり、村人、なんちゅうのか、会議しとるじゃろうから、「おれ、やられたあ」とかいつて言うつたらしいけどな。文句言つてきたつていう記憶はない。だから、村人も諦めつたのかねえ。「あれらも、なにも食うものもないから、気の毒だ。怒(おこ)りはならん。ぐらしかあ」。〔鹿児島弁で、かわいそうだ、つてこと。〕「ぐらしかあ。あれらはもう、ぐらしかこつちやあ」。

治療は最悪だった

治療はもう、最悪ですよ。〔昭和〕24 年だったかな、ぼくが最初に病棟に付添いで行つたんですよ。〔それまで〕不自由舎には何回か行つたけど。そのときに、屋久島から収容されて、5、6 人来たんかな。で、年取つたおばあちゃん、足がもう風土病みたいかなあ、まん丸い、ものすごいでかい足になつてつて。足首のとこを布で巻いてあつたですよ。——ちょっと、辛抱して聞いてね。大変なことを言うんじゃから。——それで、「治療するから、ほどけ」つって。クレゾールを薄めて持つてきて置いて。で、ぜんぶ包帯を取つて。そしたら、なんかボロボロ落ちるんですよ。蛆(うじ)。もういっぱい。もう胸が悪くなつてねえ。ぼく真つ青になつとるから、「気分悪いか?」「悪い」「ちょっと〔外に〕出て、深呼吸してこい」と言われて。そのあいだに、看護師が何人かいましたね、男の。昔の看護師。そのひとがちゃんとクレゾールで洗つて、ぼくが行つたときにはもうぜんぶ、蛆なんか処理してありましたなあ。やっぱり、治療(それ)はね、悪かつたですよ。薬がないですよ、だいいち。だからもう、ガーゼ当てて、巻くだけです。それも、包帯もボロボロ、千切れそうな包帯でね。なかには、布団を裂いたような布で巻いたひともいたですね。お医者さんは何人いたんかな。3、4 人いたのかな。だからもう、〔医者が〕処置したあとは、包帯巻いたりすることはぜんぶ患者がやりましたから。包帯洗濯するのも患者がやつたし。それで、かなり手を悪くしたひとがいましたからね。ひどかつたですよ、やっぱり、治療は。

〔ぼくがここに来た昭和 23 年だと、まだ〕大風子です。ぼくは、何度かね、腕（こ）を化膿させたからね。この治療法がふるってンです。これ、〔医者に〕「〔膿んだところを〕切る」って言われたら、やっぱり、怖かったからね。〔だけど〕患者のひとが言うと安心するんだね。ああ、これらがしとんじゃから大丈夫やと。それで、「おお、もういい頃じゃ。熟れとるわ」とか言うて。「今晚来い」というから「はい」って行くと、何するかというと、昔は、鉄の火箸がありました。炭を挟む火箸。それを焼いて、腕まくりしてめくって、上から——なんにもしないです、消毒もなにもしない——、いきなり、ジュー。「アイタァッ！」「ああ、ちょっと早かったかあ。化膿しとらんねえ」とか言うて。古新聞紙を縫（よ）って、それを穴ほかしたとこへ突っ込んで。で、その上をぐるっと変な布で巻いて。「あした、また来い」。もう、こんなに腫れてね。こないしとって医者に行くわけにもいかないから、そこへ行って、「腫れたよ」「おお、心配いらん」。で、その縫ったコヨリを入れ換えて。で、上から、タオルを絞ってきて、それを巻いて。「2, 3 日で治るよ」と。10 日かかりましたけど。切ったほうが早かった。そんなことをしたですよ。思い出す。もう大変だったですよ。

〔大風子が〕効くなんていうことは感じたことないね。みんなが言いますから。「大風子なんかで治るわけじゃないか」つって。——痛い。痛いですよ、大風子（あれ）は。それ、やっぱり、筋肉の多いところへ入れて。あとではもう、お尻に打ってもらっていたけど。「こんなとこに大風子打ったらいかん。化膿しやすい」。揉むんですよ、大風子が散るまで。散らさないと化膿するから。

〔プロミンの最初は、昭和〕23 年の 11 月。30 名分。これは厚生省が〔カネを〕出したと思うんですけど、試薬しろっていうことで。それで、その 30 名を〔医者〕は〕会議で選んで。それは、古いひと、それから、入園したばかりのひと、そういうひとを対象に選んだみたいです。「おれ、来たばかりだ。打たせろ」つって、なんぼ言ったかわからんね。もう、あとには医者捕まえて、「張り倒すぞ」とまで言ったことがある。「なんで、おれにしてくれんのじゃ！もう悪くなるばかりや。悪くなるんやったら、新薬でダメでもととだ。やれえ」。やってくれなかった。

でも、その連中が年明け、昭和 24 年の春ごろになったら、みんなきれいなんですよ。このひと、もっと症状ひどかったはずだが、きれいな艶（つや）してるなあと。思って。「おい、薬、打ってんだろ？」「打ってる」「どうだ？」ついたら、「いい。よくなって、きれいになってる」。ああ、それから大変。「おれにも」「おれにも」つって。もう治療棟で先生を捕まえて、「なんで、おれにプロミンくれんのや」。そのときの自治会長が「陳情しよう」と。——〔そのときの自治会長は〕金丸正男（かなまる・まさお）。あのころは、1 年ごとぐらいに、大海洋（おおみ・ひろし）さんと〔自治会長の椅子を争っていた〕。もう〔入所者を〕二分しちゃったからね。大変じゃった。大喧嘩しちゃったから。〔ぼくはどっちに付いたか、だって？〕ぼくはもう、そんなもん、かかわりあわない。〔まもなく〕ぼくは〔敬愛園から〕出ちゃったからね。選挙なんか全然関係なかったです。——それで、そのときの金丸さんというひとが、「陳情しよう」と。そして、厚生省と、プロミンは塩野義（シオノギ）製薬が作ったと思うんですけど、「2 通、葉書を書け」。ぼくは字が書けなかったから、書いてもらって。

葉書2枚、〔自治会の〕事務所へ持って行って渡したことがあるけど。あれが始まりじゃないですかね、患者運動のね。〔プロミン〕獲得闘争やったんですよ。

〔プロミンは〕いつごろ〔十分な量が〕入ったのかな。いいことはひとつも覚えてないですよ。ぼくはもう、いちばん窮地に立っとなですよ。急に、ここに来てから、もう、あれよあれよというまに〔ひどくなった〕。だからもう、悪いところに大風子をめっちゃくちゃ打ったですよ。で、打ちすぎて、化膿したの、この2ヵ所。そんなもんで、自分を慰めとったんかなあ。

ぼく〔の病気〕はもう、進行性。いちばん強いやつ。発病した時期も悪かったんですね。食べ物が無い。栄養が摂れない。抵抗力が生まれ無い。ぼくはさっき、発病したの〔昭和〕22年と言いましたが、それは医者が出たんです。ところが、ハンセン病は医者に行って診てもらわなきゃならないほど悪くなるには〔発症してから〕5年ぐらいかかっていますから。〔ぼくが長島愛生園にいたときに〕光田健輔の言っていることとか、それから、光田先生のとこに〔いた〕桜井という人、この人は先生じゃないんだけど、技師かなんかで、菌の検査をよくしてる人だった。この人の話を聞いて自分なりにわかったんですけど、「これ見つかったのいつか？」と言われて、「〔昭和〕22年に医者に行って言われた」と言ったら、「その5、6年前に発病したかなあ。気がつかないんだか？」なんも知らない。〔それ以前には、知覚麻痺も〕気がつかないね。あれ、不思議なことに、〔腕でも〕内側は麻痺は遅いんですね、感覚を失うのが。外側は、感覚がないとこはかなりあったんじゃないかなと思われるね。

〔気づかないまま火傷をしたことはなかったか、だって？〕火傷したのはね、えっと、岡山〔の長島愛生園〕に行ってから〔だから、昭和〕27年の秋か。ひどく神経痛をして……。

〔敬愛園から岡山の愛生園へ移ったのが、昭和〕26年の6月の末。もう、このころはプロミンでよくなるとあって、ぼく、大阪に行く予定で準備しとったんですよ。大阪へ働きに。従兄が〔大阪で〕建築をやったもんだから、「おれ、こんなンじゃけど、働かせんか」言ったら、「いいよ」って。「医者がいいと言ったら、いつでも来い」って言われて。行く準備しとった。

「おれ、肉体労働ができなくなる可能性がある」って言ったら、製図盤一式、送ってきて、「なにも考えずでいいから、線を引く稽古をしとってくれ」と言われて。簡単に角度なんかの割り出しもできる、特別な分度器を持ってきて、「これ使え」とかって。それと計算尺を持ってきて、「製図引く稽古しろ。そしたら、家のなかの仕事はなんぼでもある」って言ってくれて。で、それを一生懸命ずいぶんやったね。徹夜してでもやりおったもの。そのころまで、それこそ、「大真面目の小牧さん」で通ってたんだけどね。

母も昭和24年に入所

じつは、ぼくが療養所に入ってきてから、おふくろが〔この〕病気だっているのがわかったんですよ。おふくろの腕に斑紋が出て。おふくろは、もう絶対〔服を〕脱がなかったからわからなかった。だけど、あれはなんかあるなとは思ったんだけど、自分が病気のことを全然知らないから思い当たらなかったの。療養所に入ってから、アアッと気がついた。

あとで聞いたんだけど、おふくろはね、妹が生まれた年に斑紋が出た、つってましたから、25〔歳〕ぐらいか、昭和9年か10年、そのころに1回出たっ

で。病院に行つて、皮膚病の薬、「貝殻の軟膏をもらつて付けた」つって。で、いつのまにか消えて、それで忘れてたと言つてた。それが、ぼくが療養所に入る前ごろから、再発しとつてね。もう夏でも長袖着て、暑くてもこうにしとつたけど。隠しとつたんだね。まあ幸いなことに、手足、顔に出ないから、〔そのまま社会に〕おれたと思うんだけど。それで、おふくろは、この病気のことはある程度知つてたと思うんですよね。だから、ぼくを見て、「医者に行こう、医者に行こう」いうて、よく言つたんだと思うんですよ。ぼくは〔昭和〕23年の3月に入院して、おふくろが妹を2人連れて、ここへ訪ねてきたのが〔昭和〕24年の秋。〔予告なしに〕フツと来たものねえ。誰だ、と思つてびっくりしたら、自分のおふくろやもん。「なんじゃ？」つって言つたら、「自分も病気や」つて。「もう、どうにも、外で暮らせない」つて言うて、女の子2人、手を引いて。兄貴はもう家出して、どこへ行つたかわからなかつたですから。

兄は病気の自分と間違えられて

〔兄貴も〕気の毒やつたんじゃ。兄貴は、召集令状来て、兵隊に取られたの。それで、終戦間際に、爆弾の処理をしとつて、足を怪我した。それが元で病院へ行つとつたンやね。ほしたら、ぼくが密告されたの、保健所に、近所の人から。「あれはらい病じゃないか」つって。それで、〔上の〕妹が旭化成のレーヨン工場ちゆうのに〔働きに〕行つてたんですよ。それで、保健所は工場のほうに連絡したみたいですね。〔会社の〕診療所から〔妹に〕呼び出しがあつて、診察受けて。そしたら、「兄さん、どうしたぞ？ よくなつたか？」「はい、元氣になつた」。妹はぼくの病気のことを知りません。兄貴の怪我のことだと思つたですね。兄貴は、足から破片が飛び出してきて、「こんなのが出てきた」いうて、自分で病院に通つて。〔でも、その破片は〕取れなかつたらしいな。あのころの医療では無理だつたのかな。そして、「〔足を〕切断する」言われて、怖がつて、逃げて帰つたの、病院から。それで、ちんば引いたまま、工場に復帰したの。これが、旭化成の火薬工場。延岡市のいちばん北の山裾にある工場なんですけど、そこへ行つとつたんですね。妹は、その兄さんのことだろうと思つて、「よくなつた」「火薬工場にいる」つて言つたそうですよ。もう、おなじ系列の会社ですからね、電話一本で「こういうものがおるか？」つていうことで、「おる」「荷物片づけて早く家に帰せ」と言われる。兄貴は工場の宿舎に寝泊まりしてた。家から通うの、かなりの距離だつたからね。荷物担いで帰つてきたら、もう、荒れまくつてねえ。ぼくは、おふくろが「仕事行くな。もうこれ以上悪くなつたらいかんから。どうもないか？ 痛くないか？」つて言うから、「痛くないよ。痒くもないよ。大丈夫だ。なんもないよ」つて言つてたんだけど、けっきょく、兄貴が犠牲になつちやつた。妹はなんにも知らないから、診察を受けたときに、「兄貴は工場におる」つて言つて。で、医者は何にも調べずに、「この者を休職処分にして家へ帰せ」と。間違えられたんだ、ぼくと。——これをね、昭和33年か4年ごろ、妹が話したんだよ。それでわかつた。

〔兄貴は〕もう、家庭内暴力、ものすごかつたらしいですよ。「おれは元氣なのに、なんで辞めさせられにやいかんのか！」つって。それ、自分で〔会社に〕言えばよかつたのに、よお言わなかつたですね。内弁慶。内ではものすごく暴れるけど、外ではなんにもよお言わない男だつたんだ。だから、あとでいろんな話を聞いて、ああ、あのとき、おれが〔自分の〕病名を知つとつたら、なん

とかなったろうなあと思ひながら……。兄貴は最後はぼくとやりあって、「おまえのためにおれはこんなになった！ おまえの面倒なんか一生見らん！」って言うから、なあに、こっちは元気だからね、「なにぬかしてる、このバカ。なんでおれが、おまえみたいなやつに面倒みてもらわにゃいかんのじゃあ！」つって、それで、やりあって、殴って。1週間ばかり寝とったんじゃないかな。

兄貴は、それから、ここで一時救護で入れてもらったことがありますよ。もう、どこへ行っても、仕事がない。で、どこで聞いてきたんか知らんけれども、[ここへ] やってきて、先生と相談して、「なんとか救護してくれや。仕事があればいいんだけど、それもできねえ」つって。で、ここで、預かってもらうかたちで、じつは入園したんですよ。もう、はじめて話しますけどね。[敬愛園に] 2, 3年いて、ちょうど景気が回復するころに、ここを出たのかな。昭和 29 年やったな、ここを逃走して。

[兄貴の一時救護のいきさつですか？ 兄貴は] 一時 (いっとき) 行方不明になっておったら、警察から [敬愛園にいる] おふくろに呼び出しがあつて。警察 [の話] では、「あれは、飲んだ勢いの喧嘩だ。だから、どうこうするつもりもない」と。おふくろは「ここで働く気があるなら、帰ってこいって言ってくれ」つって。で、警察署でそのことを本人に言って、で、釈放²。それで、ここへ舞い込んできて、「なんとか、助けてくれえ」。で、おふくろがぼくンとこへ来て、泣きついて。また喧嘩して。「おまえ、おれに面倒みてやらんつったけど、おれに面倒みさすのか」。大喧嘩やって。でも、カネはないし、どうしようもないから、先生に相談したら、黙あつて、「入園させよう」と。その先生は、荒川巖³という先生。その先生がぼくに、「救護のかたちで入院させるから、それでいいか？」って言うから、「なんでもいいから助けてやってくれ」つって、ぼく、もう泣いたことあるわ。それで、ここに 2, 3年いたと思うんですよ。それで、飛び出し³。

[ここを出た後どこに行つたかは] わからないけど、[何年かして] 嫁さんと赤ちゃんを連れて帰つてきたんですよ。「仕事がない」つって。で、ぼくンとこは、どうも、喧嘩ばかりしたから、よお寄りつかんから、おふくろのとこに来て。おふくろがあるだけのカネを持たせた。それでも、「どこへも行きようがない」っていう。ここへ入れるわけにもいかんから、その部落に、くお

² 補足の語り。「あのね、その暴れて怪我したっていうのは、宮崎県の山奥にある椎葉村らしいんですよ。あすこに、もう長い年月かけてダムを造ったんですね。あとで聞いてわかったんだけど、[兄貴は] その工事に行つたららしいんですよ。で、兄貴が暴れて人を怪我させたいうて、おふくろが延岡の警察に兄貴を引き取りに行くいうたのは、聞いたことある。[おふくろは園の] 誰かに相談したらしいね。[そしたら] 『やむをえんで、行け』と行って、[延岡の警察まで] 行かしてもらえたらしいですけど。」

³ 補足の語り。「ぼくもね、けっきょく、自分で先生とこに慌てて行って、助けてもらったの。兄貴だつて病気ではない。無理やり、病気 [ということ] にさせて。『一時救護』で。兄貴は、自分は健康でどうもないから、もう、しょっちゅう出歩いて。それで、ケースワーカーの話だと、[昭和] 29 年にここを飛び出した。[そのとき] ぼくは [長島愛生園に行つていて] ここにいなかった。」

ふくろがどっからか) 古材をもらってきて、家を建てたですよ。そんなら、建て付けがグラグラしとったから、ぼくが行って直しましたけど。〔兄貴は〕いちおう〔敬愛園は〕退院したかたちになってます。もちろん病気ではないから。発病してないからね。まあ、感染してるかどうかはわからないけど、発病はしてない。

妹2人も入園

〔おふくろの入所のいきさつですか?〕もう、これも先生が、「ヨシミ、もう、お母ちゃんも病気だから、あんまりゴチャゴチャ、親を嘆かせるようなことせんと、仲良うここで暮らせ」つって言われて。「入院させる」と。で、いちばん下の妹(こ)を保育所に入れて。上の妹(こ)をまた、療養所に入れちゃったんですよ。この子、病気なのかどうかよくわからんところがあるんだ。ただ、足がふらついているから、先生が入院させたところみると、そうかなあとも思う。まあ、病気じゃなかったんじゃないかと、ぼくは思うけどね。

それで、〔上の妹は〕敬愛園(ここ)にいて、で、〔入所者と〕結婚して。相手が山梨のひとで、それこそ身内がだれもいなくて、お母さんが1人、年寄りがいて、どうにもならない。で、妹は、旦那と2人、駿河療養所のほうに移ったんですよ。そこから家に帰って、義母(おふくろ)の面倒をみてたって言ってきましたけど。——〔上の妹は〕駿河から帰ってきてね。入れてもらったばかりな。〔義母は亡くなって。そして、旦那が具合悪くなったもんですから、去年の11月、敬愛園に戻ってきた。で、旦那はここで息を引き取った。〕

ぼくの妹、〔いま〕2人とも敬愛園(ここ)にいますけど。2人とも、ぼくは病気じゃないと思ってる。〔上の妹は〕足が不自由だったから、病気だったのかどうかかわからないけど。ぼくはもう、病気じゃないと思いたいしね。

いちばん下の妹(こ)はね、最初はここの保育所にいたんですよ。それで、まあ、学校には行かなかったと思うけど、いちおう中学校卒業したかたちになっておったんじゃないけど⁴。なんにもできない、どこにも行きようがないもんだから、おふくろの陰に隠れて、敬愛園(ここ)で暮らしておった。それで誰かあわせるひとがいて、その入所者(ひと)と結婚したんですよ。それで、まあ〔旦那の〕病気は治っていたんだろうと思うけど、鹿児島(県内)の、男のほうの実家で暮らしとって。その旦那のほう体がだんだんだんだん手足が曲がったり麻痺したとこが広がってくるんで、どっか〔この〕近所に家を建てて、それから〔ここに〕治療に通うという計画するけん、ぼくもカネを集めておったんじゃないけど。「いっそのこと、ここに入れてもらえ」つって〔再入所したんだな〕。〔そのとき〕ぼくは〔ここに〕いなかった。〔どっかに行つて〕帰ってきたら、入ってる。「なんでだ?」つって。

〔このいちばん下の妹も、病気では〕ない。もう、はっきり言ってる、ぼくは「病気ではない」と。まあ、恥ずかしい話だけど。——〔生活に困った家族を〕ここで救護するつていうことで、そういう処置は取られたみたいだね。〔ぼくのきょうだい以外にも〕いくつかね、話は聞いてるけど。(〔敬愛園の中には〕

⁴ 補足の語り。「〔このへんの子が行く学校に〕大始良(おおあいら)中学というのがあるんですね。〔下の妹は〕そこへ入れたんです。ところが、やっぱり、患者の子どもつていうことで苛められて、行ってない、ほとんど。」

もう、どこで生活しようもない、健康なひとがかなりいますね。それ、やっぱり、園のほうは、どこへもやりようもないしするから、ここで、「救護」の形で収容したということがありますね。)

大阪で働く足掛かりに、逃走して長島愛生園へ

〔長島愛生園に移った理由ですか?〕 だからね、プロミンを打ったときに、ひじょうによくなったんですよ。あのころ、よく、若者のなかでね、プロミンで治るか治らないか、ものすごく議論したことがあるんですよ。ぼくらみたいな病気のもの「一生治らねえよ」。神経〔らい〕型、M型のひとたちは「治る」って言うんですよ。その証拠に、M型のひとたちはプロミン1年打ったら、いなくなったですよ、こっから。ぼくが知ってるだけでも11名かな。こっから出ていって、帰ってこない。それで、1人、ぼくとおんなし年のひとが〔この近くにある実家に所用があつて〕帰ってきたんじゃないけど。そのひとと会って話をしても、顔を見ても〔この病気だつて〕わからなかった。で、話したら、「いまでも、やっぱり、園のことは嫁さんには言わない」って。だから〔実家の〕親父が死んでも、きょうだいも死んでも、絶対に〔女房には〕死んだとは言わないで、コソッと逃げてきて、葬式すまして〔帰る〕って、言ってきました。〔社会に出てから〕嫁さんもらって、子どもがいて、その子どもが結婚して、孫がいる。「いま、孫のお守りをしてるわ」って笑ってたけど。1人だけ、そうやって帰ってきて、話ししてくれた。〈そのとき、ちょこっと、そういう話をしてね。「もう、〔女房に〕言っても差しつかえないと思うんだけど、やっぱり、怖い。言いたくない」って。〉——ほかの者は〔そもそもここには〕帰ってこねえや。

〔ぼくも、プロミンでよかった〕いちおうね。だから、〔さっき〕ちょっと言いましたけど、大阪にね、建築やとつたのが従兄でいたから、そいつを頼って、おれも早く外へ出て、仕事して、家一軒なんとしてでも建てようと思って。〔正式の〕社会復帰ちゅうことじゃなくて、いちおう、黙ってでもいいから出て、大阪で仕事をしようということで、敬愛園(ここ)を出たんだ。ぼくはね、ここを逃走したんですよ。仲間は知ってますけどね。仲間には「おれはもう、岡山へ行って、岡山から大阪へ出るよ」って。

大西先生って、ここにいたのよ。大西基四夫(おおにし・きしお)。彼と相談してやったんですよ、いちおうは。彼が言うには、「いきなり大阪に行くな」と。「むこうも迷惑だろうし。だから、いったん岡山〔の愛生園〕に入ったらどうか?」「いや、そんなとこ入ったら、もう出られんから、あの島には行くつもりはない」と、こう言つとつたんですよ。ところが、じっさいは、従兄の紹介状を持っておつたんじゃないけども、それがどこに通用するかいうたら、どこも通用しない。じゃから、従兄がどれだけ、どういう仕事をしとるかもわからないから、いきなりは、やっぱりいかんかなあ、と思って。これは長島へ行って、しばらく様子見るかあ、つって。

〔でも、逃走だから、長島愛生園へ入れてもらうのは〕大変だった。あっこは虫明(むしあけ)いうところに、長島愛生園の〔出先の〕事務所があるんですよ。そこへ行ったの。「おれは長島に行きたい。連れて行ってくれ」。なんにも言わんですよ。電話しがみついて。たぶん長島〔愛生園〕と連絡とってたんだと思う、本館とね。夕方になつても、なかなか入れねえしするから。「どうな

ってンじゃ？」つって。「悪けりゃ、悪いと言え、おれはどっかへ行く。早う決めてくれ」って、開き直ったン。〔そしたら〕「いや、船が来ますから。〔昼前の〕11時ごろからなあ、つつい、夕方まで待たされた。

〔長島へ〕行ったら、こんどは、その翌日の朝、汽罐場の職員（せんせい）じゃねえかなと思って見とったら、「鹿児島から来たの、誰じゃあ？」って言うから、「はあ、ぼくですが」「フン、病気ってわかるのお」って、こう言って、どっかへ行っちゃったですよ。礼儀知らずだと思ったから、この野郎って追っかけて行って。〔そしたら〕付添介護しとった患者が2人いて、「にいさん、あのひと、ここの医務課長さんだ。」「医務課長だろうとなんだだろうと、あの態度は許さん！」石段があったから、駆け上がっていったら、止められて。——〔その先生は、光田健輔の〕一の子分で、宮田唯夫（みやた・ただお）いうて、ここの園長をやったですよ、4代目の。——怒りついたら、その付添いの人が抱き止めて。このひとは四国のひとでね。あのひとは、あれからまもなく、横浜に仕事ができると言うて、出て行ったがねえ。〔その後〕どうなったか知らんけど。

〔そうやって〕とうとう〔長島愛生園に〕入ってしもうて。そのときに、ちょうどここで、「金丸・大海事件」があったんですよ。〔自治会役員〕選挙でもめた事件。で、「金丸が悪い、これを出せ」ちゅうて、金丸さんを、いったん〔大島青松園に〕連れて出た⁵。ちょうどそのころに、ぼくが行ってるのよ、岡山〔の愛生園〕に。おなし時期に。だから、あつこの自治会長ついたら、田中文雄いうてね、あの大将が来て、「きみが鹿児島〔の敬愛園〕から来たひとか？」つって言った。それで、ラケットを、自転車のチューブで不自由な手に巻き付けて、テニスしとったですよ。〈そこの上にテニスコートがあって、そこから下りてきたんやね。〉「きみ、名前、なんて言うんだ？」「小牧義美」「本名だろうねえ？」ちゅうから、「そうだよ」。つぶやくように、「そうかあ。違ったかあ」って。ぼくを金丸と思ったらしいんですよ。「金丸は、園管理でやってるから、1人では来ないよ。だから、違う」って、ぼくは言ったのよ。「やかましく言うンやったら、いまでも出ていくから、入れたくなければ、入れたくないって言え」つって。もう、とっかかるほど近づいて行って、文句言ったですよ。「ひとにものを聞くのに、そんな態度があるかあ！」つって。「ここの総代かなんか知らんけど」って言ったら、「まあまあ、それは勘弁してくれ」とか言って。「そんなら、もう、ゆっくりしとけや」つって。で、「誰か、鹿児島に、知った職員のひとはいないか？」つうから、「職員ならなんぼでも知ってるわ。誰がいいんじゃ？」ついたら、「誰か信用できるひとがいいなあ」つうから、「大西基四夫に聞けやい。おれがぜんぶ相談してあるひとだから、知

⁵ 補足の語り。「自治会役員の選挙でもめたんですわ。負けたほうが、米軍の民政官に、こういう違反があった言うていったら、米軍の民政官が、園長のほうに、これはおまえの問題だって突っ返してきたんだね。それで、園長がびっくり仰天したんだな、あれは。ほんとに。それで、慌てて、有線放送で、こういうことがあった、けしからん、ちゅうて。〔そしたら〕ワーと、両方に火がついたようになって。——あのね、金丸さんが、けっきょくは選挙で負けて、追ン出されるハメになったんですよ。あれは、ようするに、ほんと、単純なことやったんじゃけども、ほんとに、みんな、ワアワア大騒ぎしたね。」

りたければ、電話で知ればいいや」って言ったんですよ。あくる日、こんどは自治会の人事部長ちゅうのが来て。「青年寮に行ってくれ。部屋を空けて待ってるから。仕事は木工部」って、こういうふうに。大西先生がなんもかんも言ったんだ。だから、ぼく、あくる日からもう、お客さん待遇で。「おれ、[明日にも] 出ていくかもしれんからねえ」つったら、「いや、大西先生の話聞いた。ここでしばらく様子見れ」「おお、そうかい」つって。あのころは、まだ個人的に電話するちゅうことはできなかつたですからねえ。どうしても本館を通じなきゃ、電話できない時代だった。もう、手紙でちょこちょこやってくよりは、こっちのほうが気は楽だあとと思って。それで、ぜんぶ職員に、「こうこうでこうして、こんぐらい困るとる。なんとかしろって、大西先生に伝えてくれ」って言うのと、電話してくれよったですよ。それで、あっこの、総婦長しておったひとが、要するに、ぜんぶ教えてくれたですよ。それだから、もう、「大阪へ出るなら出るでもいいけども、もうすこし、自分の健康を管理せよ。そのうえで、行ったらええ。おまえ、勉強するんだろ」つうから、「なんにも知らないから、やらなきゃ食っていけねえ」つって言っとったんですよ。

[それで] 大阪へ行く準備しとつたら、なんのことはない、抵抗菌が出て、プロミンなんぼ打つても、病気が進行しはじめた。それで、医者と喧嘩しいしい、もう毎日のように行って「なんとかしてくれ」つって。「どうにもならん。薬がない」と。あのころ、ダイオキシソとかなんとかいう大きい粒の白い新薬を飲ませたりしたことがある。「これ、どこのもんじゃ？」つったら、「[日本の] 療養所で開発されたもんだ」「飲まない。信用できねえ」。それこそ、昔、セファランチンつくって、患者に「ナオランチン」つって言われた。その薬は、みんな知ってますからね。だから、「ダイオキシソ飲み」つって言われても、「そんなもん、飲むかい」つって。どっちにしても、[菌を] 培養して研究された薬ならある程度信用できるが、[菌が] 培養できてないのに、薬だけ先行するというのはおかしい。だから、「実際にデータがあつて、治るといふんだつたら、飲む」つって、飲まなかつたの。だから、DDS が出るまで長かつたの。そのあいだ[病気が] 進行した。DDS で 20 年ぐらい[治療] して[やっと] 治つたね。

[星塚敬愛園と長島愛生園の雰囲気は] 違わない。建物もなんもぜんぶ変わらない。だいち、ここの園、初代の園長も、光田健輔の右腕だった林文雄でしょ。だから、家も、ぜんぶ造りがおんなじなんです。ただ違うのは、光田健輔は林文雄に、「あっこは陸地だから、2メートルのコンクリの塀を建てろ」と言つたという。林文雄は「それはしない」と言つた。「木を植えて出られないような工夫をする」と。それで、檜を植えてあつたんです。で、有刺鉄線があつた。で、巡視が付いている。ぼくがいたころまで巡視がいましたよ。おれ、散歩に行くと、「義美さん、どこへ行く?」「散歩してるわあ」「どっかへ行くんじゃないかねえのか?」あのころまで、声高やつたね。「出ちゃあかんぞ!」というような。だけど、すぐにいなくなつたけど。

再び逃走して敬愛園に戻る

[長島愛生園は昭和] 26 年の夏からね。ここへ帰つたの [昭和] 34 年かな。[大阪へも] どこも行かんで。けっきょく、病気が騒いで、もうダメになつて。[ここへ戻ってきたときは] 健康はかなり害していたね。[長島から出たのも]

逃走です。誰にも言わないで逃げてきた。——あのね、〔長島は〕 邑久光明園のほうに、虫明と近いところ、あっこ、50メートルぐらいになるのかな、潮が引いたとき。で、潮が引いて、満ちる瞬間が、潮が止まるときに、盥（たらい）で渡ったんです。〔最初のころのひとは、そうやって逃げた。〕 ぼくは、そんなことしない。そのとき、伝馬船というのを、かなり個人的に持っていて、ぼくも持ってたから、それを漕いで。

〔園のほうには〕 黙って、ここに来た。「おい、帰ってきた」つって、入れてもらった。〔そのころには、熱こぶが〕 顔に吹き出して、からだにも出てきた。眉毛も抜けてた。——〔眉毛は〕 プロミンを打ち始めたころになくなって。これ、〔病気が〕 よくなったけど、生えてこなかったね。出てきたひともいますよ。ぼく、岡山〔の愛生園〕で知ってるひとなんか、きれえに眉毛が出てきたね。びっくりした。ぼくはダメやったけど。

〔ここに戻ってきた理由？〕 これは恥ずかしい話をしにゃあいかんけど、じつは、同棲するって女がいたんですよ。〔愛生園から〕 女を連れて帰ってきたんじゃないけど。女は浮気して逃げていった。岡山から連れてきたんじゃないけど、やっぱりダメやから帰して。で、ぼくはもう、ここに納まったんや。〔その後は、ぼくは園内結婚は〕 しなかった。ハハハ。

〔長島愛生園では〕 仲人さんもちゃんと〔立てて〕、いちおう〔結婚は〕 したのよ、形としては。〔結婚したけど、断種をしろとは〕 ぼくには言ってこなかったですよ。ぼくは、最初から「手術しない」って、はっきり言ってあったからね。だけど、入院したときに、診察をいろいろやったんやけど、そのなかでもう、これは手術しなくてもええちゅうこと、わかってたんじゃないかと思うんですよ。〔ぼくには子どもが〕 できないとわかってんだよ。

〔ふつうは〕 女のひとと結婚した男は手術したって言っていました。もともとは、愛生園（あすこ）が優生手術を始めたとこだからね。あれは、林文雄が、昭和18年ごろに世界をまわってるんですね。それで、フィリピンのクリオン島の療養所を見て、なんとかせにゃいかんというて、優生手術を思い切ってやろうということで、やったんや。だから、長島は優生手術（あれ）の出所（でどころ）やから、やりましたね。敬愛園（ここ）も、だから、やりましたけど。ぼくの場合はね、なにも言ってこなかったんじゃないけど。もうわかってたと思うね、診察の結果……。

〔8年留守にしたら、ここもずいぶん〕 変わってましたよ。まず、人間関係がね、8年離れたら、ガラッと変わってましたね。友達と思われてた連中も、もう嫁もらって落ち着いていたしするから。ぼくみたいな友達つくるの下手なのは、やっぱり、友達いませんね。でも〔いまでも思い出すけど〕、療養所へ入って、兄さんに手紙書こうとしたら、封筒の上書きが書けない。おれは字が書けねえかな、と思ったですよ。それで、さっき言った結核になって死んだ青年に「書いてくれ」って言ったら、「なんだ、おめえは字も書けねえのか」。ムカァツときたけど、なにも言えない。「自分で書きゃいい」。彼は、ここの会計部いうところで仕事してて、なかなか優秀な会計士やったんや。それで、むこうに、むかし、消防団詰所っていうのがあって、そこに2人で暮らしたときがある。それで知り合った青年なんだけど、彼が「字も書けない」と言ったことを笑って。もう、腹が立つけども、どうしようもない。そしたら、おっきな辞書を持ってきて、「これ使っていいから、勉強しろ。これから先は長いんだか

ら、まず字を覚えろ。おふくろに手紙も書けねえなんて、そんな恥ずかしいことあるかあ」って、怒られてねえ、さんざん。なんで、おめえに、おれ、怒られにやいかんのや、ってムカムカしたけど、それはもうそのとおりのやからね。それで、一生懸命、字引、こうしよっても、さっぱりわからんかったですよ。そしたら、半紙もってきて、上から鉛筆でこうなぞって。字を覚えるんさ。もう、たいがいの字なら、聞かれても、それはこう書くんだ、というくらい、字は覚えた。ところが文法とかなんとかはわからないから、文章は書けない。ダメなんだね、あれね。やっぱり、文法をちゃんと知ってないと。

〔なんで、ぼくは字が書けなかったのか、だって?〕だから、13で大工の弟子に入ったでしょ。小学校6年まで、とにかく籍はあったんですよ。そのころ、日向市(ひゅうがし)っていうところに住んでて。6年卒業するころに、延岡市にまた帰って。それで、中学に行きたいけども、カネはない、行かせない。だから、「学校なんか行かぬえ!」っていうンで腹を決めて。学校へ行かんで、町、遊んで歩く。おふくろは働きに行ってるから、なんも知らない。暴れまくって。で、隣のひとに「おまえんこの息子は」つって言われて、おふくろはびっくりして。

〔それまでも〕学校はもう、授業はあんまりしなかった。あのころねえ、学校で先生が教えたなんてこと覚えてないよ。芋掘りに行ったり、田んぼに田植えに行ったり。ほとんどそんなことで、団子をご馳走になったとかなんとか、そんな思い出はいっぱいあるのよ。記憶があるのはねえ、5年生のときに、算盤を教えてくれましたねえ。先生が「何円なり何円なり……」って、ぼくは算盤はじかねえで、答えだけポッポッと出して、「いくら」つって。先生があとで見つけて、「おまえ、算盤はじいちゃいねえな。何してんだ? 暗算か?」つうから、「はい」。すごく叩かれたこと覚えてますよ。そんなことが得意じゃったんだけど、字書くとかなんとかいうたら、もう……。

だから、学校はあんまり行ってない。山へ行行って、メジロ獲ってきたり。でも、テストやると、あのころはねえ、どういうわけか、先生が点数付けてくれたのを見たら、75点とか80点とかあるから、なんもしないで〔これだけできるんだったら〕もう、学校なんか行かんでいいわつって、喧嘩ばかりしてて。でも、やっぱり、おふくろは苦労してるから、小学校5年生のころから、新聞配りかなんかしたねえ。

熊本の待労院で6年すごす

〔昭和34年に敬愛園に戻ってきて〕社会復帰はそのうちに諦めてしまった。帰ってきて、その女性と3年か4年かいたんだわ、ここに。けっきょく、その女性とは別れて、それで、〔昭和〕36年か7年か、ぼくはまた、一人、熊本の待労院という私立病院に〔行った〕。あっこへ6年いた。

待労院(あすこ)〔の居心地〕は悪くはなかったですね。たまたまね、行ってまもなく、あっこ、焼けたんですよ。火災があつて全部焼けて。そのあと建て直したんですね。いまの病院は立派なものですよ。あっこはね、何年やったかなあ、〈ぼくが〔敬愛園に〕帰ってからの〉〔入所者を〕国の療養所に〔移そう〕という話が出たことがあつたけど、あそこの入園者が「死ぬまで置いとくれ」と。「自分らはもう、ここ以外に行くところない。だから、ここで、宗教の生活をする」と。

〔ぼくは〕宗教は無宗教〔ですよ〕。〔待労院へ行ったのは〕逃げ場がなかったんやな。ここで、恥ずかしくて、よお、おらんかったんだわ。〔彼女に〕逃げられているから。ただ、それだけの理由だったけどね。

〔待労院へ移った手続きはどうしたか、ですって?〕 あっここにこっから行ってたのがいて、たまたま帰ってきとったのよ。「おい、待労院に入れてくれるか」つったら、「いいよ」って簡単に言う。「おまえ一人〔の了解〕ではいかんだろうから、院長に紹介してくれるか」つったら、「なに、紹介せんでも大丈夫じゃ。まあ、連絡するわ」つって。で、「来いよ」つって、行くことになって。彼のほうが〔迎えに〕来て、「行こう」つって。「おまえ、わざわざ迎えに来たんか？」つったら、「ああ」つって言うから、一緒に行つて。6年いたけどね。

〔ぼくはキリスト教の〕勉強はなにもしなかった。

あれは、聖フランシスカ修道院かな。あすこの神父さんが、あの待労院をつくったんだね。むかし、神父さんが〔熊本の〕本妙寺〔あたり〕で放浪してる患者を見て、連れてきて、飯食わしちやあしよったんじゃけど。寝泊まりできない。で、その神父さんが、家を建てて、「ここで寝泊まりしろ」つって。

〔待労院では、男と女は〕別でしたよ。ぼくはよく〔女性の部屋へ〕お茶を飲みに行ったけどね。お茶飲みよつても、なんも言わなかったね。ぼくのはどこへ行つても知れ渡つとるから、もう呆れて、おかまいなしや。アハハハ。

〔待労院には6年いて〕ここへ戻つてきた。その理由? あっこの院長と揉めた。あの、言つたら、むこうの病院の名誉が傷つくから……。まあ、ええや。言うわ。あのな、手紙ぜんぶ開封しよったんだわ。それ、最初からそう言つてありや文句はなかったんだけど。読まれて都合の悪いものはなにもないからね。だけど、〔その〕仕方がね、お湯かなんか〔で湿らすと〕剥げるんだね、糊みたいなのは。だから、それを、そおと、また蓋してやつてんだけいね。〔だから〕わからなかったんですよ。それで、ある日、新しい宮崎の人が、待労院に入院したの。それは、旦那さんがいて、中学生ぐらいの子ども2人いたんだわ。だから、療養所に入ると、すぐ男がまつわりつくからいうて、県が心配して、待労院に連れてきたひとなんですよ。そのひとが来たときに、顎(こ)に1個、斑紋があつたのね。「これがなかなか消えにくい。これがあるから、近所のひとがいろいろ言う。小牧さん、これを取る方法はないか?」と。〔待労院には〕医者(せんせい)がいないでしょ。そのころ、多磨全生園に成田稔つていう先生がいたがね。園長しとつた。あのひとがよく来よつたんですよ。3ヵ月に1回ぐらい来たかな。で、ぼくは、成田先生知つてたから、すぐ手紙書いて。こういうひとがいるから来てくれ、つって⁶。それ、「成田先生が何月何

⁶ 補足の語り。「〔その女のひとは〕あゝのころ、44、5歳やつたかな。〔病氣だつてこと〕どこもわからないんですよ。顎(こ)に、ひとつ、斑紋みたいなのがちょっと〔あるだけで〕あつて。そのひとは、恵楓園か敬愛園に、県は入れようとしたんだけど、敬愛園(こ)ちへ入れると、もう、男がバアツと集まってくるから、それは嫌だつてんで、なら、待労院がいいだろうつて、県が待労院に連れてきたのは、覚えてます。そのひとは、のちに、〔多磨〕全生園の成田園長がときおり来よつたもんだから、ぼくが間に入って、『なんとか社会復帰させろ。家で在宅治療したらええやないか』と云つて。

日に来ます」っていうことを黒板に書いてあったのよ。「ああ、成田先生が来るの？」つったら、「あんたの手紙に書いてあった」って、こう言ったからわかったんですよ。「なんだあ！ 読んでるのか！」「読んでる」。それで、ぼくは怒ったんだ。「入院者の手紙なんかね、開けて、なにをしようとしてんだ！」あのときは、毎日怒ったですよ、院長捕まえて。「何してんだ！ こんなことをすることはしない。われわれは患者だ。修道士じゃない。信者であっても、そんなことまでしなきゃならねえのか」つって。毎日怒ったねえ。それから、〔手紙を〕開けなくなりました。

もうひとつは、1回ね、厚生省が社会復帰の訓練をするために、カネ出したことがありました。敬愛園（ここ）でも、段ボール箱をつくる機械なんか買って、訓練しよったんじゃないけど。それやっても、出ていこうという者、だれもないのね。だから、けっきょく、機械もなんも、あとは処分したんじゃないかね。——待労院（あそこ）にも社会復帰援助金というのが後からきたんですよ。それで何するかといったら、あつこの代表みたいなのが——こっから行つたのが、ぼくを入れてくれたのがいたんですよ——、彼が「豚を飼おう」と。〔ぼくは〕「もっと、洒落（しゃれ）たものはないのか？」つって。「患者が豚飼って、どうするんや？」「それしかない」と。「ぼくはする気はないから、勝手にせえ」つて言うつたんや。そしたら、病院側で、「売り上げたカネの半分は、働いた人みんなにやって、あと半分は、使い道を考えます」つて言うから、「それはダメだ！」院長に言った。「そんなものがあるんだつたら、われわれに相談して、どうするのが一番いいか、ちょっと考えてくれつて言うのが筋じゃないのか？ 民主主義的にやろうぜ。おれらは修道士じゃねえ」つって。いうようなことで、けっきょく、ぼくが計画を立てにやいかんことになって。ぼくは「残りのカネをどうするかは、みんなで考えろ」。ぼくは会合には行かなかったけど、〔みんなが〕ちゃんと決めたよ。それ病院に提示したら、病院はそれを見て、「ああ、こうしようと思つてたんだ」みたいなことで納得したらしいけど。——売上金から経費ぜんぶ差し引いて、利益あがったら、半分は給与でしょ。残った利益のなかから、事業資金みたいに積み立てるんだつたら、何パーセントか積み立てたらいい。残りを、不自由なひとに、わずかでもいい、分けてやつたら、それがいいんじゃないのかあ、つて決めて。で、病院側も「わたしたちもそのようにしたほうがいいんじゃないかと思つてたんだ」と。ぼくは、「それを内緒でやられるのは嫌いだ。民主的に考えろつて言われたほうがいい」。〔そうやって〕ぼくは抵抗したもんだから、まあ、ここらが引け時かあ、というようなもんだつた。

自治会活動を手伝い、全患協本部に詰める

待労院に6年いて帰つてきたのが、昭和43年だつたと思うわ。まだ若かつたですよ。でも、そのころからおとなしくなつたね、おれは。やっぱり、あつちやこつちや行つて回つて。自分の子ども時代のことから考えて。おれは、こういうところでしか生活できない、そのように生まれてんだなあ、と思つてから、それならばもう、自分の命を捨てるか、生きるなら自分なりに生きることを考えるか。もう毎日、そんなことばかり考えていたね。自治会の仕事なん

それ、手続きとつてもらつて、そのひとは〔実家に〕帰りましたけど。」

か、ぼくは全然しなかったです。外に出てする仕事はしますよ。畑を耕すとか、大工仕事や左官(しゃかん)するとか、そういうことなら、いつでもオッケーで、出ていくけども。事務所なんか行くと、もう、ものすごい、気うつだね。憂鬱になっちゃう。字は知らねえし、計算はできねえし、しとったもんだから、あんなところは好まない。外の仕事やったらなんでもしたね。だから、余分に体を壊したってこともあるけどね。かなり無理した。無理することで、自分を忘れていた面もあるから。それで、[昭和]47年に車の免許を取って、車を買って、それからもう、乗り回して遊んでばかり。ほとんど園にはいなかったね。

昭和47年、42〔歳〕で免許取りに行った。〔入所者でも自動車〕学校へ入れてくれるって言ったもんだから、「ああ、免許取らしてくれるんなら来るわ」つって。で、町の自動車学校へ通って。で、手が不自由だったから、県のほうに適性検査に行つてこいちゃうから行って。そしたら、むこうの検査官はやさしいひとでね、「ぼくは警察あがりだ」って自分で言ったですよ。「いまから聞くから教えてくれ」つって、いろいろ聞かれて。それで、いまの病気の状態とかも聞いたですよ。で、「いまはもう、こうこうだ。法律は昔のまま残ってるんだけど、いまはもう、出歩いて、咎められることはない。けれども、予防法があるために、肝心なときに困るときはある」つって言つたら、「おお、そうか。なら、人に迷惑をかけることはないな？」つて言うから、「それはないですよ」つて。「感染しないか」ということなんですよ。「それはないです」つて言つて。そしたら、「よし、わしの手を握れ」ちゅつて、指2本、こう出したですよ。ギュッと握つた。「力はあるな」と。「多少の力は残ってるわあ」つって。したら、「制限するが、いいか?」「何を制限するんですか?」つたら、「車の大きさとおもひ乗せるかということだが」つて。「ああ、それはもう、自分一人でもいいんだ」つってゆつたら、「じゃあ、6人。総重量が300キロ。これでいいか?」「けっこうです」「もし、仕事でもするつていうことがあつて、大きい車(やつ)に乗りたかつたら、相談にはのりますから、いつでもおいで」と、こう言つてくれた。やさしかったですよ。それで、〔自動車の練習〕必死になつたけどね。〔昭和〕47年の8月に免許証もらつて、翌年、車買ったんかな。それからもう、ここにはほとんどいない。寝に帰つてくるぐらいのもんで、乗り回してあるいて。だから、この入所者の問題なんてのはなんにもわからなかつたですよ。

ただねえ、そのときに、ぼくの友達、ぼくとおなじ年の、青年〔寮〕のおんなじ部屋で暮らしたことがあるひとが、自治会の事務所で総務部長してて。これがいっちゃん忙しいところだつたんですよ。彼が「助けてくれえ。うち来て、仕事してくれえ」というから、「おお、してやるよ」。彼を助けて仕事をしてたら、〔昭和47年の〕11月に彼が沖縄で事故で死んじゃつて。そのあとを引き継ぐ者がいないんですわ。男が7人か8人かいても、彼らは「辞める」とか言うんですね。〔自治〕会長が、「おまえたちの部長(あれ)が死んだんだから、おまえらのなかから誰か、後をちょっと手伝つて、やれ」ちゅつてゆつたですよ。「あんな頼み方があるかあ」つて、やる者がおらん。彼の骨(こつ)を迎えに行つたときに、車のなかでそんな話をしとるから、「見苦しいこと、そんな話、すんな! どうせ、おれにやれつていうて、〔声が〕かかってくることは目に見えてる。〔みんな〕残れ。仕事はしろ。部長はおれがする」つて。それ

で、一件落着。〔昭和〕47年の11月から〔ぼくも〕事務系の仕事をするようになったかなあ。タイプライターも稽古したし、いろんなことを覚えましてねえ。

ぼくはねえ、自分でも不思議に思うんだけど、予防法の廃止まではぼくも〔自治会活動を〕やりましたから。〔昭和〕62年、〔東京の〕全患協〔本部〕に行つて、3年いましたからね。〔そのときの〕全患協の会長は、曾我野一美（そがの・かずみ）、〔大島〕青松園の。彼が「予防法をどうしても改正しよう」つて。そしたら、みんなもう、ビビるんですよ。「もういい」つて。「これで待遇受けりゃ、予防法があったほうがいい」つて言うような連中までいたからねえ。で、曾我野〔会長〕が全国回つて、「自分はこのままで死にたくない。なんとしても予防法を直して死にたい」つて言つて。ぼくも、そりゃそうだと思つたものだから、彼の言うことはなんでもした。彼がやるつていうことを決めてから、カバン担いで、全国〔の療養所を〕回りましたからね、ぼくも。

〔多磨全生園の全患協本部に行つたのは、昭和〕62年。平成2年に帰つてきた。まる3年いたかな。ちょうどそのころ、あの予防法でいちばん揉めたんですよ。長島〔愛生園の自治会〕なんか、完全にもう、反対と言つたからね。駿河〔療養所の自治会〕も。「予防法（あれ）があるから、カネもらえる。あれがなくなつたら、カネの出所（でどころ）がなくなる」。「予防法なくなつたら、いまの給与と年金までなくなるんじゃないか」と、長島は言つた。「おまえら、そんなことしか考えられないのか」つて喧嘩したんですよ。「なくならないように闘争するのが運動じゃろう」。守りに入つたら何もできないですよ。「そんなんだつたら、おれ、全患〔協本部〕にいる理由がない。そんなことで、全患のなかで仕事したいと思わないわ。このくそ暑いときに、カバン担いで全国回るなんて、そんなアホなことがあるかあ」。顔見知りばっかやからねえ。むこうもぼくのことを知つとるから。それだから、やかましいゆつて、怒つて帰つたことありますよ。「それやつたら、おまえたち、支部長会議やるときに、『早期に予防法を改正させよう！』なんて、かっこいいスローガンぶら下げておいて、それをしないで、ナニゴトだ。支部長会議で決めたやつ、しねえなんて」。そこまで言つたですよ。けっきょく、それが利いて、のちには特別に反対はしないと。ただし、付いていくということはしないかもしれん、と。

〔裁判についてですか？〕これが、ちょっとねえ、ぼくはひじょうに残念にいまでも思つてんだけど。組織で、予防法を改正させようとやつて〔きた〕。

〔「らい予防法」の〕責任を問おうというのは、組織でなければならぬ。ぼくはもう、絶対そう思つた。だから、自治会で議論してね、機関決定して、裁判〔をやるならやる〕ということになるだろうと思ふんだ。〔しかし〕あれだけ反対がおつたら、組織としてはやらないということが決まる〔かもしれない〕。それなら、それは個人的に〔裁判に訴えるの〕もやむをえないだろう。それだつたら、ぼく、一番先に旗を振つたかもしれない。〔現実には〕自治会がゴチャゴチャ言つて、なんにも決まらない。中央も〔決まらない〕。そんな状況でどうしたらいいんだつて、そういう議論してる最中やつたからね。

だから、ここの場合は、九州弁護士会〔連合会〕がアンケートを取つたんですよ⁷。どういふふうに収容されたか。病気はいつごろなつたか。治つたか。

⁷ 星塚敬愛園の入所者、島比呂志（しまひろし）氏からの問題提起を発端にして、

どうにしてるか、というようなことをやったんですよね。それで、ある程度、資料を凝縮したものを持ってのりだから、この裁判は絶対に勝てる、弁護士はそう思ったのね。わたしも裁判やれば負けることはないということはおわかってたね。もう、憲法違反ということ、はっきりわかっているから。だから、われわれが賠償金を請求するのかどうか、そんなことはいろいろ議論せにやわからないけども、裁判かけたら勝つということは言える。ただ、状況として、「いままで、村でも町でも、自分のうちのまわりで隠してきたのに、こういうことでテレビでワンワン言われたら、あらあと思ひ出されて、そういえば、こン子もそうじゃなかったろうか、いま、どうしよってるやろうかと、ウワサが立つ。それはいかんから、裁判なんかは困る」って、みんな言ったんだ、自治会の〔役員〕連中が。だからもう、入園者も黙ってしまったんだね。そこへ弁護士が入り込んできて、「裁判は勝てる。おカネもらってやる」ということから、それに乗った連中が何人かいたと。——そういうやり方には、おれはもう、絶対〔賛成〕しない。ぼくは、とうとう最後まで原告に入らなかつたんですよ。

補償金はもらったけど、それはもう、全部やっちゃって。そんなもん〔自分のために〕使う気もなかつたから。やっぱりねえ、生きていうことだから考えるなら、自分の意思っていうものをちゃんと通しておかないといかんってことは、自分にはわかってンですよ。まあ、たまたま、2003年に、中国へ行く機会があつて……。

〔その前の、1996年の予防法の廃止ですか？〕あのとときに、特別部会⁸は、学者なんか集まつて、大谷〔藤郎〕さんが座長で、全患協も〔会長が委員として〕参加しとったわけですよ。あれ、大会、7回ぐらいやつたと思うんだけど、最後に、これでいい、厚生省で〔らい予防法廃止の〕案文を作つて国会に提出します、ということまで決まつて、そのときに、部会のひとが「みなさんがたは、国に対して金品の請求をすることがあるのか？」って言つたら、〔委員として出席していた全患協の会長が〕うっかり「組織ではやらない」と言つちやつたんだ。そのために、患者の気持が動揺して、もういままさら家族に迷惑かけたくない、と。もうおカネなんかいらねえ、いまで十分だというようなひとが多かつたんだけど、けっきょく、星塚〔の入所者〕が九州弁護士会〔連合会〕のひとと相談して、「〔裁判を〕やろう」と。で、恵楓園〔のひとたち〕も入つて、〔第1次原告が〕13人。

それで、かれらが、個人的な形でやっちゃつたから、ぼくは、そんなことはやらない、と。なんていうのかな、ああいうことをやつて決着つけるとかいうんだけど、ぼくはもう、〔予防法廃止で〕決着ついていると。菅直人厚生大臣を謝罪させた。国家として責任をとるといふことも言つてくれてあるし。一生面

九弁連は、1996（平成8）年1月、九州・沖縄の国立ハンセン病療養所5園の入所者を対象に、アンケート調査を実施した。当時の5園の入所者2,299人のうち1,391人から回答を得た。長期にわたる収容の実態が明らかとなり、また、断種・墮胎の手術を受けたと答えた者が434名に達した（ハンセン病違憲国賠訴訟弁護団『開かれた扉』講談社、2003年）。

⁸ ここで小牧さんが「特別部会」と言っているのは、「大谷藤郎座長」ということからして、1995（平成7）年7月に厚生省内に設置された「らい予防法見直し検討会」のことだと思われる。なお、この会議は、8回開かれている。

倒をみしてくれるなら、もうそれでいい、と。ならば、一人当たり、見舞金みたいなもんで200万ぐらいもらえば、おれは上等、っていうふうに個人的に思ってたの。ぼくはもう、そういうことでワーワー言いたくなかったから、ほとんど園にいない。で、交通事故で怪我した。もう、死ぬか生きるかで。生き延びたけど。自動車で交通事故をやったんですよ。目を打撲して、もう真っ暗。なにも見えなかった⁹。——[いまは]ある程度、見えるですよ。ただ、ちょっと字が小さいと、見えにくいけど。まあ、なんか、虫眼鏡、こうやりながら、ぼちぼちと。

回復者の支援のために中国へ行く

[中国とのかかわりは]2003年の3月ですね。笹川記念保健協力財団が主催で、療養所に呼び掛けがあったン。「中国の回復者のひとたちと交流しませんか」「中国へ行きませんか」って。ぼくは、そんなことで行くつもりはなかったのよ。ただ、観光は、桂林の漓江(りこう)下りやります、と。桂林の川下りが、観光のメインに入ってたン。——平成7年にね、NHKがハイビジョンの実験放送を流したの。テレビを買い換えて、チューナー付けて、アンテナ付けて、ハイビジョンを観たんですよ。そのときに、桂林が映された。ウワァーと思いましたね。こんなきれいなところが、いまだに、世の中にあるんかと思って。ああ、行きたい、いうても、[所持金の]0が1個足りないなあと思った。

[自治会]事務所から「行きませんか？観光は桂林だ」。すぐ飛びついた。それで行ったことから始まるんだけど。むこうとの交流っていうことで、会議のあと、回復者の村に行った。そしたら、[ぼくらが]行くっちゅうことで、こざっぱりと掃除はしてあったんですね。日本とそう変わりやしねえや。ちつとぐらい、日本のほうが豊かな感じかなあ、というようなもんで、[最初は]あんまり興味はなかったんですよ。[ところが]よく考えたら、手伝ってくれる職員が誰もいないような気がする。手に誰も包帯してる者いない。日本[の療養所]だったら、何人かやっぱり、治療に通っていますよね。1割のひとがいま治療に通ってるんですよ。傷をもったひとが。そういう心配もないから不思議だと思って。傷もないのかなあと思いながら、こう見てて。足元を見たら、靴がいびつになっていたので、ああ、このひとは、足が不自由だと思ってね、通訳の人を呼んで、「すまんけど、この靴を見せてほしい」言ったんですよ。脱いだんですね。そしたらもう、すごい臭いがして。汚れてる。足の裏を見たら、傷がそのままなの。なんにも治療も手当てもしてないんですよ。傷、むきだし。それ見て、震えたね。エエッと思った。「なんで治療しないのか?」「医者はいない。看護師はいない。材料はない。薬は買うったって、カネがない。

⁹ 補足の語り。「[交通事故は平成]8年の3月。だから、予防法廃止した年ですよ。病院にいたのが、1ヵ月。傷の回復は早かったですよ。ただ、頭とかなんとか、怪我の痕とかいうのが自分で気にならなくなるのに、半年以上かかっているね。[それと]目を打撲してたもんだから、目がなかなかよくなるんで。これ2年ぐらいしたかなあ。目は、宮田眼科に連れていってもらって。あこの先生、わたし知ってたもんだから、車で怪我したんじゃちゅったら、よお診てくれたんですけどね。」

なにもないんだ」。言うこと聞いてびっくりして、考えさせられたねえ。桂林のことなんか、その場では踊って喜んだけど、もう忘れてるわ。やっぱり、かれらのことのほうが気になって。なんでだあ、と思って。で、財団の連中と、通訳のひとを交えて、いろいろ話したら、〔療養所を〕解放したときに、給料を払ってくれるところ、どこもなくなったから、その療養所にいた医者も看護師も逃げて、あと残った回復者（ひと）のための医者（せんせい）とか看護師とか材料とか何にもないんですよ。それがわかってから、もうちっと深刻になったなあ、ぼくはなあ。これ、なんとかできんかなあ、と思って。いままでの経験から言うなら、かれらの治療は、おれのほうが上手（うめ）えかもしれないなあと思いつつ。あとは、薬と材料をどうするか。1年ぐらい考えたかねえ。

で、翌年も、財団に、もういっぺん企画してくれ、と。中国へ行きたい、と。それで、最初行ったとき、2003年は30人いたんですよ。〔200〕4年に12名かな。このひとたちの治療ぐらいなら、おれにもできる。やり方は、苦しい時代に覚えてるから。だから、材料、薬あれば、かれらの治療ぐらい、おれできる。それで、2004年に2回目行って、帰ってきて、なんとか助ける、ちゅうたらおかしいけども、なんかできんかなあと思って。それで、けつきよく、その、カネは〔補償金の〕残ってたやつがいくらあったもんだから、これを中国の〔回復者のための〕薬代とか、そういうものに使ってもらえるようにしてくれんかあ言うたら、「預かります」って。〔それから〕道路がなくて、何十キロも歩かないと隣の村に行けないというところがあって、道を造ったら5キロぐらいで行ける〔ようになる〕。そこの道を造ったのと、1つの村に学校を作って、それにそのカネを充てた。で、残りを、ぼくはいちばん言っとったのは、子どもがいる。「その子どもの教育は？」って言ったら、「学校に行っていない」。それはいけない。いろいろ聞くと、やっぱり、差別されてんですよね。「村の子」「患者の子」。ハンセン回復者の村は、昔の療養所なんですけど、そこに家族ぐるみでいるひとがいて、子どもがいるんですよ。全国でね、だいたい3,000人ぐらい子どもがいるって言われてましたね。かれらは学校へ行ってない¹⁰。で、それどころじゃない、国民としての登録もない。中国は不思議なことに、都会戸籍と農民戸籍ってあるでしょ。その農民戸籍にも入ってない。隠れて住んでるから、その登録がない。「だから、おまえたちは中国人じゃない」と言われたら、もう、それっきりなんですよ。で、中国には、いま、回復者が組織しているNGOがあるんですよ。「管達康福（ハンラコウフク）協会」ちゅうんだけど。アメリカのIDEA¹¹の人が、アジアの支部として中国に作ったんですよ。ところが、これは、広東省、江西省、雲南省、この3省しか活動できないことになってんですよ。〔理由は〕わからない。その3省だけは許可をくれて、NGOとして認めてるらしい。で、四川省とか貴州省とか湖南省とかにも、調査に入ったんだけど、ひどいところは、「キャンプに来て、かれらのためにこういうことをしたい」といって申し入れをすると、「キャンプはせんでいい。そんなカネがあったら置いていけ。おれらがキャンプをする」言ったんだ。だから、ま

¹⁰ 聞き取り場面に同席した敬愛園の職員によれば、回復者村の子どもたちが学校に通えるように、小牧さんは「小牧基金」をつくったとのこと。

¹¹ IDEAは、ハンセン病患者・快復者やすべての人々の尊厳の確立をめざす国際ネットワーク型のNGO。「IDEA ジャパン」も、2004年に発足している。

た、どっかの役所をつうじて、調査さして、キャンプに入ろうつってやってんですけどね。湖南省へは行きました。ぼくも2ヵ所行ったけど。神戸女学院大学の学生(せいと)たちが、今年で3年かな、そこへキャンプ行きました。10人ほど行っとった。去年、彼女らとぼく会いましたけどね。そのひとたちが、2月、ぼくがここに入院したときに見舞いに来てくれて。

さっき〔の話〕中途半端になったけど、なにかおれにできないか。で、おカネを寄付したけども、そんなことすりゃええちゅうもんでもないし。なんかしようじゃないかと自分で思ってね。で、日本財団の黒沢司(くろさわ・つかさ)という人がいて、そのひとと相談したら、「そこまで考えるんか? ヨシッ、なんとかしようじゃないか」と。そしたら、笹川記念保健協力財団の理事をしている山口和子さんというひとが、「ええのがいる。帰りに会わせる」っていうから、「会わせてくれ」。〔200〕5年の3月だね。あつこの、江西省の南寧(ナンニイ)というところで会議をやったとき、ぼくも行って、挨拶せえちゅうから、挨拶もしましたけど。そこではじめて、あの赤ん坊を抱いとる〔写真の青年〕、あれ、原田燎太郎っていうんです。早稲田〔大学〕出身で。で、彼が2003年に卒業すると同時に、中国のリンホウという村にもぐり込んだ。——〔彼は〕キャンプには、前の年にも行ったと言っていましたよ。ところが、キャンパーに中国の学生がいない、これはどういうことか。彼が、そういうことを報告書のなかに書いてあったのを、ぼくは見たんですよ。おお、そうだよ。肝心なことだ。ここをなんとかせにゃいかんって、ぼくもそのときから思っとったの。だけど、〔その時点では〕顔もなんも知らない。

〔原田燎太郎は〕2003年、卒業すると同時に〔中国に〕行って、村に入って、キャンパーを集めてキャンプをやる。そのときに、中国の学生たちに相談を持ちかけたんですね。かれらは「中国にそんなところはない。中国はもう文化的に、なにも苦労していない。そんな村なんか中国にあるわけない」と、学生が言ったと言っていましたね。「じゃあ、行こうじゃないか」。中国の学生5、6人連れて行ったんです。びっくりしたと言っていましたね。もう、「こんな怖いところ、よくない。うつるんだろう」と言って、キャンプするものがいなかったんですよ。それを、韓国の活動家と一緒に〔むこうの〕大学に行って、学生たちに話しかけるんですね。で、中国にはボランティア団体というのはいくつかあるらしいんですよ。で、かれらと話しして、すこしずつ理解してくれて一緒にキャンプした連中と、大学をあちこち回り始めたんですね。それで、できたのが、この「Joy in Action」。JIA。中国語で、これ、「家」と〔いう意味に〕なるんですね。これが、いま、彼がやってるボランティア団体の名前。中国の学生たちは、みんな、こう言います、「行動的快樂」。

〔で、燎太郎との出会いだけど〕もう、自分ではできることはあれしかないと考えてたからね。かれらの後遺症、傷があるひとを、なんとかして治してやりたいと。そこで、財団に無理言って、ぼくを中国と一緒に連れて行ってくれと。3度目。「なら、もういっぺん行くか」ということになって、集めたら、8人かな、行ったんですね。〔200〕5年の3月に。で、会議終わったあと、村を見に行こうつって、行くときに、中国の学生が多くてね、で、マイクロバス2台チャーターしたんだけど。大型ついたら入らんもんで、その道。そしたら、かれら学生が、ジープを1台チャーターしてきて、それに何人か乗ってきてた。そのなかに、燎太郎がいたんですね。おれはバスに乗っとった。山口和子さん

て財団のひとつが、「小牧さん、療太郎とすこし話をしてくれ」つって。「じゃ、療太郎を呼べ」ちゅうことになって。3時間か4時間か、バスのなかで話をした。「おれはこういうことしかできねえから、こういうことできるようにならんのかあ」つって言ったら、「なる」つって。で、ぼくは、[200]5年の8月に、治療道具と薬と材料を担いで、桂林の平山（ピンシャン）という村に行っただすね。日本の、FIWC九州（フレンズインターナショナル国際ワークキャンプ九州）の学生連中が（そのピンシャン村にキャンプに行くことを計画しとったんです。それ、原田療太郎と会ったら、FIWC九州のリーダーを紹介するからいうて、紹介してくれたんや。おれ、そのひとと電話でやりとりしながら、材料集めて、段ボール箱に詰めて。それで、おれ、福岡空港ではじめて会って）一緒に連れて行ってもらったんですよ。よし、治療の仕方、どうするのか。とにかく、まず自分を清潔にしておいて、使う道具も消毒をちゃんとして、清潔な材料、ぜんぶ、汚さないように。ちゃんと、傷はこういうふうにするんだということを教えてやって。それ、10日おったんですよ、キャンプで。村人と連中がパーティやって、一晩騒いで、帰ろうと。あれ、このまま帰ったらまた、このひとたちは元の木阿弥で、なにもなくなる。それじゃあ、10日治療しても何になったんだ。こんなことで、キャンプやって、やったというのでは、それはダメだ、と。それで、あいつに、「おれ、残るわ」「なんで？」「だって、おまえ、10日やそこらやっても、また元の木阿弥で、何をしたかわからん。そんなことではやる価値はなんにもない」「そんな、言葉もわからんだろう」「そんなものは、どうでも問題じゃない。なんとかなる。そんなことよりも、ここでぼくの飯を作ってくれるひとを探してくれ」。すぐ見つかったんですよ。で、学生たちはみんな10日で引き上げて帰った。療太郎も帰ったんですよ。ぼくひとり残った。ビザが切れる10月まで、2ヵ月おったんですよ。とにかく治療を続けなきゃなんにもならない。だから、治療してやる必要があるし、覚えさしてやらにやいかんから。で、2ヵ月のあいだに、かなり手伝ってくれるひとができて。手足のいいひとが。できるだけ、ぼく教えたいんです、そのひとにね。最後はこのひとに頼むしかないと考えたから。「これ、こうすんだ。ああすんだ」と教えて。毎日連れて歩いて。それで、治療して。で、1人は右足が、関節が蜂の巣みたいになってて、もう、これは歩けない。医者でも、薬でも、これはもう治らない。経験からそう思ったから、療太郎が来たとき、「療太郎、このひとに、ちょっと説明して、ちゃんと伝えてくれ。この足はもう、薬でもお医者さんでも治らない。長生きしたかったら、切断しなさい。義足でもいいから、傷が治ったら、また、元気に歩けることもできるし、みなと付き合うこともできるようになる。あんたが嫌がってんじやったら、それはもう仕方がない。しかし、いつまでもこのまま置いとったら危ないよ。だから、切ることを勧めるよ」つって言って。最初、嫌がってた。それはもう、本人の意思やから、もういいわ、と思って。中国人というのは、天命ということをよく言いますね。「天命。おれ、もう寿命がきたんだ。だから、もう逆らわない」と言って死んでいく。「そうじゃない。すること全部してから、それでダメならもう仕方がない。だけど、なにもしないで天命はない。だから、切ることを勧めるよ」つって帰ったんですよ。[そのときは]「嫌だ」って言いました。——ぼくが帰ったあと1ヵ月で、切断してた。義足履いて歩いてるんですよ。[再会したとき]泣いて、喜んで。抱きついてね。「おまえのおかげだ」

言うて。それ、去年の7月。彼は桂林に住んでいる兄に会いたいと。桂林の理科大学の学生たちが、探したんだね。そしたら、そのひとのお兄さんがいることがわかって。で、「とにかくいっぺん、村に行って、弟に会ってくれ」つって。それで、案内して、そのひとに会ったらしいんですよ。そしたら、「生きていたんか」つって。40何年か会わないでいたっていうのかな。「家に帰ってこい。なんにも心配いらんから」つって。それで、学生たちがいろいろと手伝って、なにもかも手配して、里帰りさしたですよ。それに立会いに、ぼく行きましたけどね。本人はもう、顔真っ赤にして、喜んでてね。興奮してましたけど。「よかった」つって。「[兄とは]一生、もう会えないと思ってたけど、元気に会えたからうれしい」つって。もう、中国の新聞にも、そのこと出ましたけどね。それをね、学生たちが、その肉親を探し歩いてくれた、これがすごい。

ぼくが2ヵ月いたあと、学生たちは「日本から来たあんな不自由なひとが一生懸命やってくれてるのに、おれらはなんにもせんでキャンプに行くばかりだ。これでいいか」と議論したらしいんです。だったら、「週に5、6人、彼がしているようなことをしに交替で行ったらどうか」ということになつたらしいんですよ。ぼくはかれらに「こうするんだ、見とれ」と、ちゃんと、やり方までぜんぶ教えて。そしたら、かれらは、おれに「見とってくれ。これでいいかあ」つって、一所懸命するんです。「オーケー、オーケー。ただし、材料がないから[再利用しなくちゃならない]。使ったものは、古い釜を見つけて、煮沸して消毒しなさい。これだけはちゃんと守ってやらないと、感染症は、どこになにがあるかわからないから。それだけ気をつければ満点だ」つって。で、かれらは週に交替で、金曜日、昼から行って。で、金曜日の夕方、治療して、土曜日して、日曜日して、それで帰るんだ。週に3日したらね、大丈夫ですよ。そういうことを教えて、かれらがやってくれと、それがぼくにとってはもう、行った甲斐があったと、そういうふうに思いましたね。

自分でも不思議なんだけど、ひとに受け入れられないような生き方しかできないで、世間に受け入れられない、そんな社会で暮らして、生きていて、どうなんだって、いっつも思っとったンね。もう、いい加減なところで、自分で自分の始末をしよう、もう終わったほうがいいと、いっつも思っとった。それまでにすることは何かというようなことばっかり考えていたんじゃけど、だんだん、消えたね。むしろ、もう、そういうことは忘れて、ひとがどう思っで見ようとも、そんなこと囚われずに、自分が動きたいように動いたらええや、と思った。いまはそう思ってますね。

In the Devotion of Supporting the Chinese Hansen's Disease Recoverers' Town: An Interview at Hoshizuka-Keiaien, a Hansen's Disease Asylum

Yasunori FUKUOKA & Ai KUROSAKA

Mr. Yoshimi Komaki was born in Hyogo prefecture in 1930. He lived in Miyazaki prefecture and was then confined to Hoshizuka-Keiaien in March 1948. In 1951 he moved to Nagashima-Aiseien another sanatorium in Okayama prefecture because Okayama was close to Osaka where he had dreamed to work in the future. The aggravated symptoms of his disease forced him to give up social rehabilitation and to return to Hoshizuka-Keiaien in 1959. Later he also stayed in Tairōin, a sanatorium in Kumamoto supported by the Catholic church for 6 years from 1962 to 1968. During 1987 and 1990 he served as a member of the executive committee of Japan Hansen's Disease Patients Council in Tama-Zenshōen, the sanatorium in Tokyo.

In 2003, he first visited the Hansen's disease recoverers' hamlet in China. For 2 years from 2005 to 2007, he stayed in China to care for the Chinese recoverers.

This interview was conducted in August 2008 when Mr. Komaki was 77 years old. The interviewers were Yasunori Fukuoka, Ai Kurosaka and Nao Shimonishi. In May 2010, the interviewers visited Mr. Komaki's place and received Mr. Komaki's approval of the draft of the interview script.

We reacknowledged the odiousness of the Segregation Policy through the interview with Mr. Komaki telling that his siblings (1 elder brother and 2 younger sisters) who did not have Hansen's disease also had to stay in the sanatorium. His brother lost his job and his place to live for being confused with Mr. Komaki who had Hansen's disease. His brother was able to enter the sanatorium under the pretext of a temporary relief with the help of a kind doctor.

His younger sister also had no place to live after their mother, having Hansen's disease, entered the sanatorium following Mr. Komaki. Even more, their father already died earlier, and there was nobody to take care of the younger sister. She had some problem in walking. Although it was not from Hansen's disease but the doctor intentionally diagnosed her as a Hansen's disease patient because he believed that it would be more helpful for her to enter the sanatorium than to stay outside the facility. She got married to a man staying in the sanatorium.

The youngest sister had stayed at the facility for uninfected children

in the sanatorium at the beginning but could not leave even after she graduated from a junior high school. She just kept secretly staying at her mother's room in the sanatorium without permission because she had no place to stay outside the sanatorium and also got married to a man in the sanatorium.

Mr. Komaki said it was “shameful” that uninfected members of his family took advantage of the sanatorium as the place to stay. However, we accepted this event as an example that showed how the Segregation Policy deprived opportunities in the society from the family of Hansen's disease patients.

In addition, Mr. Komaki's story was quite touching. He said that he visited Guilin in China to enjoy the boat tour in a river at the beginning but he encountered the people in the Hansen's disease recoverers' hamlet and found that they were abandoned with no care—for example, no care for aftereffects. After that, he has been using the compensation that he received from the Japanese Government for helping Chinese recoverers and their children.

Key words: Hansen's disease, segregation policy, life story